



第43回 早稲田こども 日本語研究会

標記の研究会を以下の日程で、オンラインで行ないます。

事前登録制(参加費は無料)

★参加希望の方は、1月26日(木)までに、以下の川上郁雄研究室 HP にある参加フォームで申し込みください。<http://www.gsjal.jp/kawakami/>

「移動する子ども」学を考えるシリーズ 13

日時：2023年1月29日(日)

15:00～16:30 (日本時間)

開催方法：Zoomによるオンラインで実施。

研究交流：

今回の発表は、幼少時に来日し、日本で成長した若者、また日本で生まれ複数言語環境で成長した若者が、自身の移動の経験と記憶を、そしてことばをどのように解釈しているのかについて探究した、気鋭の若手研究者の発表です。そして発表者自身の経験も交えながら、「移動する子ども」学について考えます。

発表① 複数言語内の位置づけから考える継承語 — 対話的構築主義アプローチに基づくライフストーリーをもとに

太田真実(大阪大学大学院博士後期課程)

発表② 親子間使用言語を日本語とするニューカマーの親子から見えることばの
実践への意味付けと親子関係 — ことば観との関わりに着目して

中家晶瑛(お茶の水女子大学大学院博士前期課程)

発表者の研究論考は、『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』
13号(2022)に掲載されています。事前にご一読の上、ご参加ください。

http://www.gsjal.jp/childforum/journal_13.html

＜太田真実さんの発表要旨＞

本研究は幼少期より複数言語環境で成長した若者の複数言語内における継承語について、その他の言語の位置づけとの差異を検討しながら、個人の中にどのように位置づけられているかについてライフストーリーをもとに明らかにすることを目的としている。調査の結果、調査協力者にとっての継承語は日常的に使用する日本語と存在感としては同じでありながらも、学習においては学ばなければならないものとしてやや強制力が伴うことが確認された。また、継承語との距離感については、言語能力の他に、使用頻度や使用相手との関係性を踏まえた使用する際の感情や意義なども考察要素として分析を行った。複数言語環境で成長する子どもたちが増加していく中で、かれらの継承語を現地語との関係のみで捉えるのではなく、成長過程で触れる様々な複数言語の中で継承語の位置づけを考えることで、継承語の特徴がより詳細に表れることを論じた。

＜中家晶瑛さんの発表要旨＞

本研究は、親子間使用言語を日本語とするニューカマーの親子を対象とし、彼らのことば観はことばの実践の意味付けと親子関係にいかに関わるかを明らかにすることを目的とした。語りから、Aさんのことば観およびことばの実践への意味付けは、「不安感を秘めた言語能力意識」（川上編，2010）が見られなかったが、自ら生き方を選択していくようになったAさんの姿勢を支えるものであることがうかがえた。父親Bさんには、より良い教育の追求という子どもに対する言語教育への責任感も見られた。また、ことば観と密接に関わりながら2つの親子関係が築かれ、そのうちの1つから親子の情緒的なつながりの形成がみられた。その結果、親子の情緒的なつながりの形成は、親の言語能力や親子間使用言語に左右されないことと、さまざまな環境から複合的に形成される親子関係も重視する必要性が示唆された。

主催：川上郁雄研究室および早稲田こども日本語クラブ